

叙勲の受章にあたって

平川 久 嘉

(昭和42・経済)

思いもよらない知らせ

令和三年春、私は地方自治功労による叙勲(旭日双光章)受章の栄に浴することが出来ました。知らせは思いもよらないことで信じ難いものです。日本国天皇からの授与で改めてその尊さ、重さを感じ、感謝の気持ちで一杯になりました。

今日までこれといった秀でたこと、目立った活躍など出来なかつたと思う私にも、自分らしい生き様、やり甲斐を感じて頑張った時があったことを思い起こすことが出来ました。新型コロナウイルスの収束に向けて引き続き三密防止やマスクの着用が求められるなど、各人の行動が制約されるなか、自分を振り返る良い機会と受章に思い当たることを考えてみました。

強いて言えることは、社会人として働いた主な職業が自衛官、新聞記者、市議会議員と国や地域に大いに関わりのある勤務であり、その職務を地道に真面目に遂行してきたことが認められたからではないかと思えます。

その間には職場の上司、同僚、後輩、地域の支持者、家族と多くの方々の親切なご指導、ご支援があつたからこそであり、お世話になつたこと、感謝の気持ちを忘れてはならないと思っております。

夜間の経済学部経済学科に入学

昭和41年に地元の高校を卒業後、国分の陸上自衛隊教育隊に入隊、東洋大学へは自衛官と勤務しながら翌42年に夜間の経済学部経済学科に入学し、46年には卒業することが出来ました。

在学中は日米安保反対の学生運動が最も活発な頃で、首都圏ではベトナム反戦デモや大学のロックアウトがあり、一般の学生がまともな授業を受けられない混乱の時でした。卒業のためにテキストや参考文献を探し苦労してレポート作成にあつたものです。

中学生の頃からの夢であつた奄美の先生になるための教員免許も取得し、休暇をとって鹿児島県の教職員採用試験に挑戦したこともありましたが、力及ばず諦めたのも苦しい思い出です。

長年の自衛官勤務

35年余の自衛官勤務ではいろんなことを学び体得することが出来ました。訓練による心身の鍛錬や知識・技能の修得から組織の一員としての地位や役割に応じた使命感、強い責任感、団結心、戦史、戦術、戦技、更に平和や防衛に関する事項など多岐多様でした。

勤務地は九州を始めに、関東地方約25年、北海道8年と半年になります。家族からは生活の便利さ、築いた隣人達との友情などを理由にこの地に住みたいと意見も出しましたが、私の定年後は「郷里に帰り奄美の地に骨を埋める」の思いに理解してくれました。

地元新聞記者と町議会議員時代

奄美に帰つた直後から幸運にも地元の新聞社支局に勤務することが出来ました。取材や報道を通してお世話になつた人々への恩返し出来る職務に全力で取り組みました。支局勤務は約2年半と短いですが、この時期は政府による平成の大合併が押し進められた最中で合併の可否を模索する群島内の市長村首長や地域住民の声を取材するために奔走したことが思い出されます。

ところが、思いもよらない新聞社の破産で解雇になり、これからどうしようか?と案案している時に町会議員の選挙がありました。住民の代弁者としての活動や故郷に恩返しができる良い機会と思い、意を決して立候補し、多くの方々の支持を得て当選することが出来ました。その後も引き続き奄美市議会議員として就任、4期15年の議員活動に努めました。

奄美市議会議員時代

議員活動では行政の施策推進、課題解決への取り組みなどの審議、討議を通じ、市民が安心して暮らせる生活基盤づくりに留意しつつ公約の実現に努めてきました。この間に関わつた印象に残る事業には全国でも例の少ない1市1町1村の飛び地合併の誕生、奄美の集中豪雨被害、瀬戸内町、奄美市への陸上自衛隊の配備、地域の均衡ある発展、少子化対策、教育の機会均等のための大島北高の存続をかけた施策、念願かなつての奄美大島・徳之島・沖繩島北部西之表島の世界自然遺産登録があります。

奄美市の充実・発展のため、議員として愛郷心、母校愛を持って地道にこれらの重要な施策の推進、事業の完遂に関わつてこれたことは大きな喜びであり誇りとするものです。

この度の叙勲受章にあつて改めて光栄に思うとともに、お世話になつた皆様への感謝の気持ちを忘れず精進し、今後も一人の住民として社会や地域に可能ななかり役立つ働きをしていきたいと思えます。

